「教育の質」における ノン・アカデミック教育の ニーズ実態調査

ルアンパバーン県ンゴイ郡の事例

Needs for Non-Academic Education in the Quality of Education:
A Case Study of Ngoi District, Luang Prabang Province, Lao PDR

京都大学大学院総合生存学館「海外サービスラーニング（ラオスプログラム）2026」
最終報告会レビューと渡航調査の分析・解釈

横山泰三 博士（総合学術）
特定非営利活動法人Wisa 理事
ルアンパバーン県 ラオス文化と民話研究所 副所長
2026年11月

Wisa.

EXECUTIVE SUMMARY

要旨

2026年11月12日、京都大学大学院総合生存学館（GSAIS）の必修科目「海外サービスラーニング（ラオスプログラム）」の最終報告会が開催された。受講生は、約半年にわたる準備学修、ビエンチャンとルアンパバーンでの14日間の現地調査、事後分析を経て、「質の高い教育を形づくるものは何か」という共通の問いに、安全・電力・家族と非行・応急手当というそれぞれの専門的関心から答えた。本レポートは、各発表の要旨と魅力を整理し、プログラム・マネージャーの視点から今年度の調査を分析・解釈するものである。

KEY MESSAGE

各発表はいずれも、「教育の質」を教室の内側ではなく、子どもが学校に通い、学び続けるための生活条件の側から問い直した。そこに共通して見いだされたのは、リスクや欠乏が日常の中で「当たり前」になることで見えなくなるという構造である。この不可視性を、外部者の問いと現地の人々との対話によって可視化することこそ、本プログラムがめざす対話実践学習の到達点であった。

3つの主要な知見

FINDING 01

常態化による不可視化

「バイク事故は日常の一部」「停電は大した問題ではない」。リスクが日常化すると、統計にも当事者の語りにも課題として現れにくくなる。

FINDING 02

アクセスから「使える」へ

電化率や教育の実施状況といった「接続・提供の有無」ではなく、子どもが実際に使え、学べるかという条件が教育の質を左右する。

FINDING 03

層と層のつながり

家庭（ミクロ）、学校・地域・医療（メゾ）、政策・インフラ（マクロ）の連結部にこそ、支援と協働の余地がある。

本レポートの構成

第1章でプログラムの概要と報告会の枠組みを示し、第2章で4名の発表の要旨と魅力を整理する。第3章で横断的な分析・解釈を行い、第4章で次年度に向けた展望を述べる。

01 | PROGRAM OVERVIEW

プログラムの概要と報告会の枠組み

本プログラムは、自国と異なる文化・社会習慣をもつ地域の人々と対話しながら学ぶ実践学習（Dialogue-based Experiential Learning）を通じて、国際社会の多様な構造と人々の生活環境を理解し、グローバルリーダーに求められる判断と行動の倫理を身につけることを目的とする。特定非営利活動法人Wisaは、企画・運営支援、講義、現地コーディネートを担当した。

PHASE 1 | 2026年6月〜7月

準備学修（全7回）

反転授業形式で社会課題の分析と調査設計に取り組み、ラオス人スタッフによるラオス語講座とインタビュー演習を実施。

PHASE 2 | 2026年9月6日〜19日

現地調査（14日間）

JICAラオス事務所、教育スポーツ省、ラオス国立大学、スパヌボン大学、SVA、UXO関連機関、医療機関等を訪問。ハットキップ村でのホームステイと村立学校でのアンケート調査を実施。

PHASE 3 | 2026年10月〜11月

事後分析・最終報告会

インタビューとアンケートデータを定性・定量の両面から分析し、ラオス側の関係者も交えた最終報告会で発表。







写真左：ハットキップ村の村立学校での授業参加に先立つ自己紹介／中：ホームステイ先の村で行われたバーシー（歓迎の儀式）／右：農地でのフィールド調査（いずれも2026年9月）

現地調査の中心となったのは、ルアンパバーン県ンゴイ郡ハットキップ村でのホームステイと村立学校での授業参加である。受講生は村の家庭で寝食をともにし、バーシー（歓迎の儀式）で迎えられたのち、学校で授業に参加し、生徒へのアンケート調査を行った。農地や漁場での作業体験を通じて、子どもたちの放課後の暮らしにも触れた。

01 | FINAL PRESENTATION

最終報告会——日本とラオスをつなぐ対話の場

最終報告会は2026年11月12日（木）16:45〜18:15（日本時間）、Zoomにより日本とラオスを結んで開催された。発表資料の一部を英語とラオス語の二言語で作成し、現地調査に協力いただいたラオス側の教育行政・大学・学校関係者、ラオス国立大学の大学院生とともに、調査結果と問いを共有した。

4名
京都大学大学院総合生存学館の受講生による研究発表

10名
ラオス国立大学経営管理大学院（LJI-MBA）の大学院生がオンライン参加

2言語
英語・ラオス語で問いを共有（Zoomによる日本・ラオス間の同時接続）

ラオスからの参加

- ビエンチャン首都教育スポーツ局
- スパヌボン大学（企画・国際協力部門）
- ビエンチャンの中等学校の教員
- ラオス国立大学経営管理大学院 ラオス日本センター（LJI-MBA）の大学院生・スタッフ

日本からの参加

- 京都大学大学院総合生存学館（受講生・教員）
- 弘前大学の関係者
- 特定非営利活動法人Wisa（企画・運営支援、現地コーディネート）



現地での発表・意見交換の様子（2026年9月）

ラオス側の参加者にとって、報告会は自らが協力した調査の結果に触れる場でもあった。教育行政、大学、学校現場、そして次世代の経営人材を担う大学院生という異なる立場から参加を得たことで、受講生の問いは日本の大学院の教室を越え、ラオスの教育と社会をめぐる対話へと開かれた。



図1　なぜラオスへ行くのか——「異なる文脈、一つの共通の問い」（報告会冒頭スライド）

01 | FRAMEWORK

「教育の質」を捉える二つの枠組み

学校教育の前提へ——生存のための総合教育

第一の枠組みは、質の高い教育を教科学力（言語・数学・理科・社会・歴史）だけでなく、生活技能とウェルビーイング（安全と非行予防、健康と救急対応、事故・災害への備え）と、それらを支える学習の条件（電力、学校環境、動機づけ）を含む「家」として描くものである（図2）。

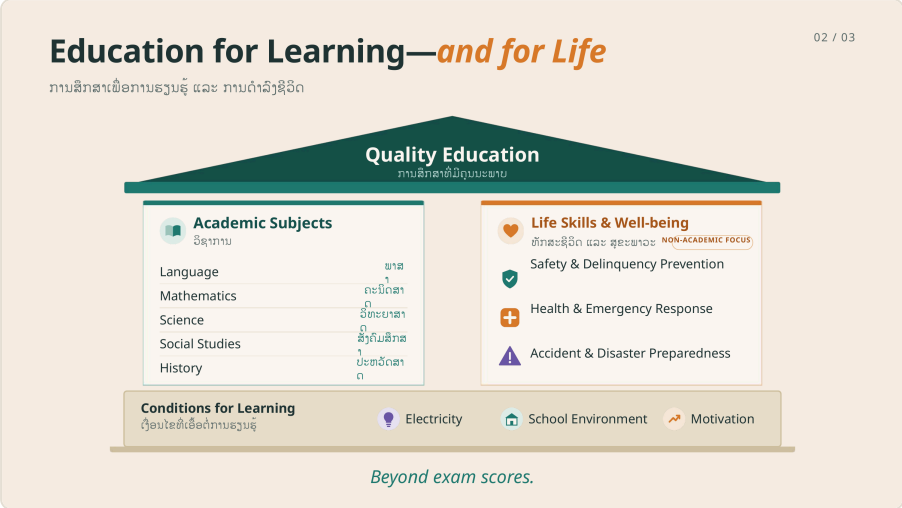


図2　Education for Learning — and for Life：教科学力・生活技能・学習の条件からなる「教育の質」

一人の子ども、三つのレベル

第二の枠組みは、子どもの学びを中心に、ミクロ（家庭・仲間・教師）、メゾ（家庭・学校・地域・診療所のつながり）、マクロ（政策・サービス・経済・送電網）の同心円を置き、安全・健康・電力の三つのテーマを重ねたものである（図3）。教育学・保健・工学・経済学・社会学の視点から、4名の個別の研究を一つの絵の中に位置づけることをねらいとした。

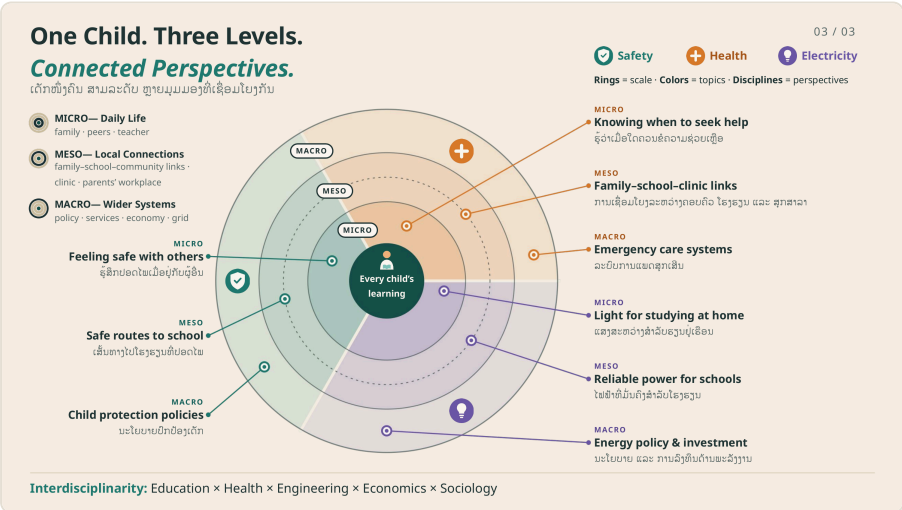


図3　One Child. Three Levels. Connected Perspectives.：安全・健康・電力を三層で捉える学際的枠組み

各発表の要旨と魅力

01 ラオスにおける安全教育の再考 ——現地での経験と生徒アンケートから

Rethinking Safety Education in Laos: Field Experiences and a Student Survey

大久保良太

渡航前は「安全教育をどう拡充・改善するか」という内容面の問いを持っていたが、現地で登校の継続、家事・家業の負担、教員不足、通学時の交通事情に触れ、「子どもが学校に通い、学び続けられる条件」へと問いを広げた。ハットキップ村の村立学校の生徒103名（9〜16歳）へのアンケートでは、「役に立つと思う安全教育」として交通安全が82.5%と突出し、半数以上の生徒がけがを伴う事故を目撃していた。ルアンパバーンの教員からは「バイク事故は日常の一部なので、生徒はわざわざ報告しない」という語りを得た。結論では、文部科学省（2019）の生活安全・交通安全・災害安全の枠組みを参照しつつ、何を優先し、どう教えるかを現地の教員・生徒と決め、調査結果を学校へ返して短い教材を共同開発するという、サービスラーニングとしての次の一歩を提案した。

82.5%
「役に立つ安全教育」として交通安全を選んだ生徒

58.3%
けがを伴う事故を目撃したことがある生徒

36.9%
自身が事故でけがをしたことがある生徒

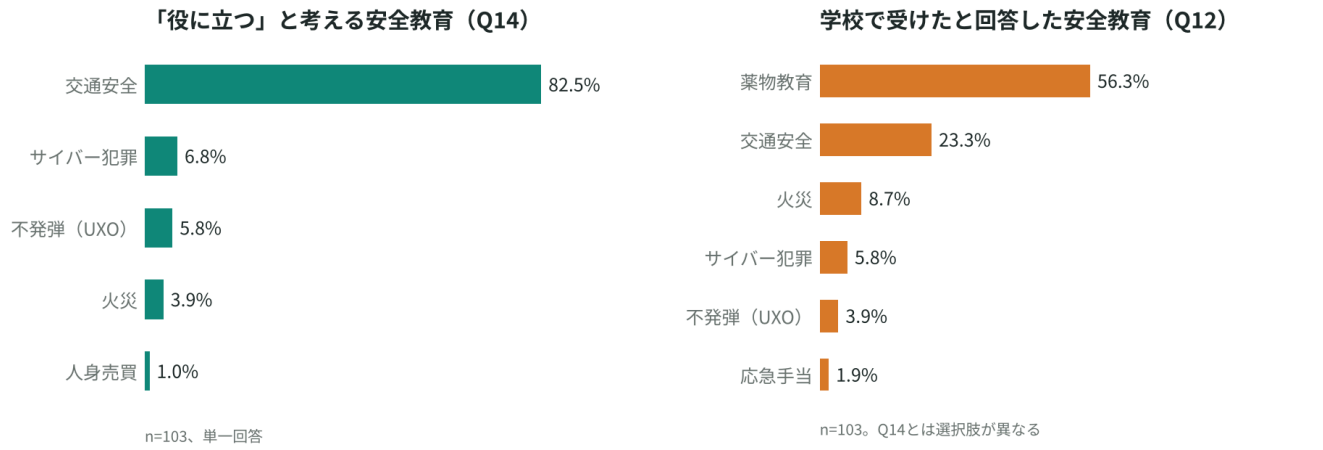


図4　生徒が「役に立つ」と考える安全教育と、学校で受けたと回答した安全教育（大久保の発表資料をもとに作成。二つの設問は選択肢が異なるため、単純な比較はできない）

この発表の魅力

- **データへの誠実さ。**「見たこと・聞いたこと」と「質問票が示しうること」を一貫して区別し、選択肢の異なる設問を引き算して「未充足ニーズ」とすることを自ら戒めている。
- **問いが変わる過程そのものを示した。**渡航前の想定が現地で更新されていく道筋を発表の軸に据え、サービスラーニングの学びを可視化した。
- **移植ではなく協働の提案。**日本の枠組みを当てはめるのではなく、「現地の人々と一緒に決める」形をとり、倫理的リーダーシップという本プログラムの目標に正面から応えた。

02 ラオスの学校と家庭における電力のアクセスと利用

Electricity Access and Use in Schools and Homes in Lao PDR

野村好太

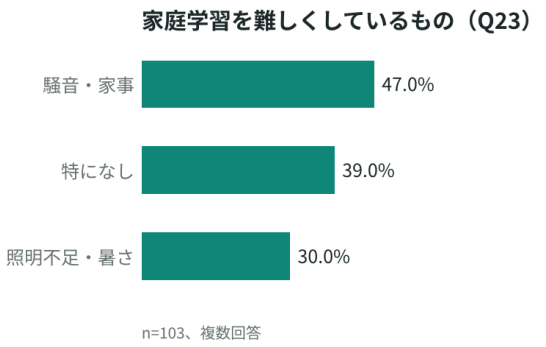
ラオスの公式な電化率は96.5%（2024年）に達するが、「つながっている」ことは「使える」ことを意味しない。この問題意識から、公式のアクセス率と学校・家庭での実際の利用との間にギャップがあるか、あるとすれば供給側か需要側かを問うた。方法は、JICA・SVA・教員・病院職員へのインタビュー、ハットキップ村でのホームステイ観察、生徒アンケートの三角測量である。停電の頻度、照明の不具合、電圧の低下、学校の電力事情、修理拠点までの距離といった複数の手がかりから、世界銀行の多段階枠組み（Bhatia & Angelou, 2015）に照らして検討し、供給側の課題は明確である一方、需要側の課題は相対的に弱いと結論づけた。そのうえで、アクセス率と並べて停電・電圧を公表すること、村単位ではなく学校単位で電化を数えることを提言した。

96.5%
ラオスの公式電化率（2024年）

43%
先月5回以上の停電を報告した生徒（数値回答者81名中）

55%
家の照明に何らかの問題を挙げた生徒

3回/日
ホームステイ先で観察された停電（各30分〜2時間）



注目すべきは、生徒が家庭学習の妨げとして挙げたのが、電力よりも騒音・家事であった点である。発表者はこれを、停電を村人が「大した問題ではない」と受け止めていることと重ね、「人々が停電を受け入れているからこそギャップが見えなくなる」と解釈した。追加の電力で最も欲しいものが炊飯器（35%）であったことも、電力が学習よりも生活の基盤として位置づけられている実態を示している。

図5　家庭学習を難しくしているもの（野村の発表資料をもとに作成）

この発表の魅力

- **一文で伝わる問題設定。**「Connected does not always mean usable」という明快な命題を、統計・観察・語りの三角測量で検証した。
- **数値の裏にある生活世界への洞察。**停電が「問題として語られない」こと自体を分析対象とし、受容がギャップを隠すという構造を捉えた。
- **政策への橋渡し。**電圧計による計測という次の調査手段と、統計の示し方を変える具体的な提言まで示した。

03 世帯の生計形態と少年非行に関係はあるか ——ラオスの若者への質問紙調査から

Is There a Relationship Between Household Earning Style and Juvenile Delinquency?

野口雪乃

出身地・新潟県の稲作農家の生活経験から、「労働集約的な農業世帯では家族と過ごす時間が長く、孤独を感じにくいため、子どもは非行に関わりにくいのではないか」という仮説を立てた。ベトナムにおける家族環境と少年非行の先行研究（Chau et al., 2025; Nguyen, 2022）を参照し、ラオスとベトナムの社会指標を比較したうえで、共通アンケートを分析した。放課後に家の仕事を手伝う生徒は約8割にのぼった。親の職業別に見ると、孤独感、非行の目撃ともに農家世帯と非農家世帯の差はほとんどなく、仮説は支持されなかった。そこから、自給的農業はむしろ親子が別々に長時間働くことを意味しうること、非行への接触は世帯ではなく地域レベルの現象である可能性という、新たな問いを導いた。

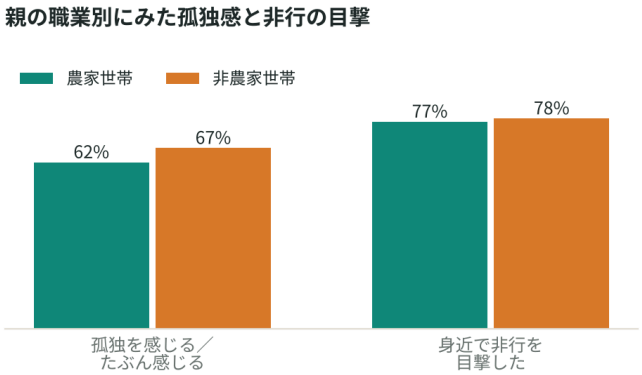


図6　親の職業別にみた孤独感と非行の目撃（野口の発表資料をもとに作成）

80%
放課後に家の仕事を手伝う生徒

78%
身近で非行を目撃したことがある生徒

この発表の魅力

- **生活経験から立てた仮説。**自らの出身地の暮らしを出発点に、異なる社会との比較へと問いを開いた。
- **「支持されない」結果を問いに変えた。**仮説が成り立たないことを正面から受け止め、行き止まりではなく分析的に興味深い問いへと転換した。
- **前提の相対化。**「農業世帯＝家族の時間が長い」という日本の稲作農家を前提とした想定が、ラオスの自給的農業の文脈では成り立たない可能性に気づいたことは、比較研究の核心を体験的に学んだことを示している。

04 ラオスの生徒における交通安全と応急手当のニーズ

Road Safety and First-aid Needs among Students in Laos

高橋訓子

生徒の交通安全への意識と、けがや急病の際の応急手当に関するニーズに焦点を当てた発表である。報告会の枠組み（図3）では、「安全」と「健康」の二つの軸をつなぐ位置にある。

2026年度の渡航調査をどう読むか

定式化

今年度の調査は、「教育の質」を、子どもが学校に通い学び続けるための生活条件の問題として捉え直した。各発表が独立に見いだしたのは、リスクや欠乏が日常化することで見えなくなるという構造であり、それを対話によって可視化する営みにこそ、サービスラーニングの意義がある。

1 「常態化による不可視化」という横断的知見

SAFETY
「バイク事故は日常の一部なので、生徒はわざわざ報告しない」（ルアンパバーンの教員）

ELECTRICITY
停電は「大した問題ではない」（ハットキップ村の住民）

COMMUNITY
非行の目撃は世帯の違いを超えて約8割（生徒アンケート）

三つの発表に共通するのは、リスクや不便が「日常」として受け入れられることで、制度的な統計（電化率、学校での安全教育の実施状況）にも、当事者の語りにも、課題として現れにくくなるという構造である。これは、資源へのアクセスの有無ではなく、資源を実際の機能、すなわち「できること」へと転換する条件を問う潜在能力アプローチ（Sen, 1999）や、電化を接続の有無ではなく供給時間・品質・費用の多層で測る多段階枠組み（Bhatia & Angelou, 2015）と同じ方向を向いている。学生たちは文献から出発したのではなく、現地での対話から同じ地点に到達した。この点に、今年度の調査の最大の成果がある。

2 生態学的システムとしての「教育の質」

報告会で示したミクロ・メゾ・マクロの三層は、子どもの発達を入れ子状の環境システムの相互作用として捉える生態学的発達論（Bronfenbrenner, 1979）を、本プログラム用に簡略化したものである。各発表はこの三層を縦に貫いた。野村の発表は、家庭の照明（ミクロ）、学校の電気代を共同体の資金が支える構造（メゾ）、公式統計と電力政策（マクロ）を一本の線でつないだ。大久保の発表も、生徒の事故経験（ミクロ）から、日常の事故を教員が把握しにくい学校と家庭の関係（メゾ）、安全教育の制度的枠組み（マクロ）へと視野を広げた。教育の質を学校単体の問題ではなく、層と層の「つながり」の問題として捉え直す視点が、報告会全体を通じて共有された。

3 一つのデータを、異なる専門の目で読む

今年度の特筆すべき方法論上の成果は、受講生が共同で設計した一つの共通アンケート（ハットキップ村の村立学校）を、それぞれの問いから分析したことである。同じデータが、安全教育の視点からは交通安全への強いニーズとして、電力の視点からは停電の常態化として、家族と非行の視点からは地域レベルの課題として読み解かれた。一つのデータを異なる専門の視点から読み解く経験は、学際研究を実践的に学ぶうえで極めて有効であった。反転授業形式の準備学修で調査設計とラオス語のインタビュー演習を重ねたことが、短期間の現地調査でのデータ収集を可能にした。

04 | WAY FORWARD

「返す」サービスラーニングへ——次年度への展望

大久保の発表が提案したように、サービスラーニングは調査結果を発表して終わるのではなく、協力いただいた学校・地域にわかりやすい形で結果を返し、ともに次の行動を考えるところまでを含む。今回の最終報告会には、ビエンチャン首都教育スポーツ局、スパヌボン大学、ビエンチャンの中等学校の教員、ラオス国立大学経営管理大学院（LJI-MBA）の大学院生、さらに日本からは弘前大学の関係者がオンラインで参加し、二言語で問いを共有することができた。これはその第一歩である。

01　結果の返却

ハットキップ村の学校へ、ラオス語の要約版で調査結果を返し、教員・生徒と話し合う場をつくる。

02　教材の共同開発

交通安全と応急手当に関する短い教材を、現地の教員・生徒の声を反映させて共同で作成する。

03　継続調査

停電・電圧の計測を含め、語りと計測を組み合わせた調査を複数の学校に広げる。

04　経年比較

過年度のプログラムで得た知見と接続し、地域の変化を経年的に捉える。



村の学校での授業参加では、受講生が企画したワークショップを生徒たちと一緒に行った。調査は「話を聞く」だけでなく、ともに手を動かし、場を共有することから始まる。結果を返し、教材をともに作るという次の一歩は、この関係の延長線上にある。

写真：村の学校でのワークショップ（2026年9月）

これらは、ルアンパバーン県のラオス文化と民話研究所（CAF）を拠点に、現地の人々との関係を積み重ねてきたWisaだからこそ担える役割である。Wisaは今後も、日本とラオスをつなぐ学術・教育交流と、現地の対話に根ざした次世代の育成に取り組んでいく。

ACKNOWLEDGEMENTS & REFERENCES

謝辞・参考文献

謝辞

本プログラムの実施にあたり、現地での調査・受け入れにご協力いただいたラオス政府関係機関、教育機関、NGO・医療機関の皆様、ホームステイを受け入れてくださったハットキップ村の皆様、そして現地コーディネートを担ったラオス文化と民話研究所（CAF）のスタッフ一同に、心より御礼申し上げます。

参考文献

Bhatia, M., & Angelou, N. (2015). *Beyond connections: Energy access redefined* (ESMAP Technical Report 008/15). World Bank.

Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Harvard University Press.

Chau, H. X., Tuan, H. M., Ha, D. N., & Thang, T. N. (2025). Family circumstances and the law violations of juvenile delinquency: A quantitative research in Vietnam. *International Journal of Innovative Research and Scientific Studies, 8*(2), 2925–2934.

文部科学省. (2019). 『「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育』.

Nguyen, T. T. (2022). Juvenile delinquency: Theory, reality, and reasons in Vietnam. *Indonesia Law Review, 11*(2), 217–227.

Sen, A. (1999). *Development as freedom*. Oxford University Press.

※本文中の数値は、各受講生の最終報告会発表資料に基づく。